

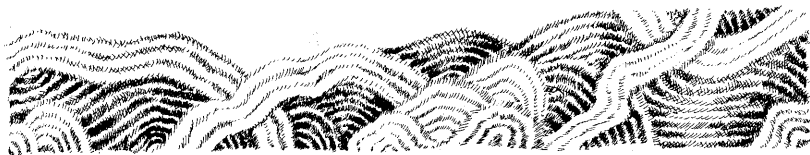


# 生きがいへの転換

津守 真

人は自分が選んだのではない運命を生きねばならないことがある。そのときに、自分にはもっと違った人生があったはずなのにと思うのでなく、自分が投げ込まれた状況と本気に取り組むことにこそ真の人生があるという思い方をし、明るく精一杯にそれに立ち向かうと、いままで知らなかった新しい世界が開けてくる。

養護学校に子どもを連れてくる親たちを見てみると、そのことをつくづくと感じさせられる。だれも自分で選んで障害をもった子どもを生んだのではない。その逆であ



る。思いがけず自分の子どもが歩けない、ことばを話さない、激しい発作を起こす。そのようなことに遭遇して、親はショックを受けて眠れぬ夜を過ごし、未来が閉ざされたような気になる。そこに人間の原型がある。そして、そこから立ち上がったときの親の明るさに、私は人間の尊厳さを感じさせられる。

このことが起こるのは子どもの幼児期である。

しばしば、親はそのショックから立ち直れず、その間に障害の子どもを自分の生活から切り離し、早くから自分の目に見えないところに隔離しようとの考えを起こす。あるいは、普通の子どものレベルにまで引き上げなければその子の価値を認めない。その場合には子どもは最初の障害に加えて、もうひとつ重荷を背負うことになる。親からも見放されたという、ずっしりと身にこたえる重荷である。

どの親も、そんな重荷を子どもに負わせたいと思っではない。それを促すのは社会である。専門家をも含めて周囲の人々の考え方である。これまでの社会には障害に対するマイナスの力が強かった。いまや世界中がこの点で変化しつつある。国際障害者年、人権思想の普及など、多くの人々の社会的努力は大きく、それを考えると環境問題など暗いことの多い私共の世界にも希望が生まれて来る。

一時はショックを受けた親たちも、自分が選んだのではない運命を肯定的にうけと



めて生きようとするようになったとき、親も子も成長し始める。それはあきらめではなく、だれでもが対等に生きるという人間観への変革である。

保育者がすることは、子どもの保育の実践を通じてである。保育者自身が子どもであるがままで価値あるものと心から認め、子どもが今日の一日を楽しく過ごせる日とする保育をすることである。それができるとき、保育者は親と語る者となり得る。

親が子どもに向かう覚悟を決めるには、他の人の助けを必要とする。日々の小さなできごとと一緒に語る人を必要としている。子どもと向き合う原点は、一度わかればそれで済むというものではない。何かが起こるたびに原点は確認し直さねばならない。子どもが電車やバスの中で大きな声を出したとき、同年齢の他の子はしないようなことをしたとき、人の目は殊更に鋭く感じられる。こんなとき、何故自分だけこんな目にあわねばならないのかと、自分が選んだのではない運命に不平不満を言いたくなる。このことは保育園や幼稚園、学校の保育者も同様であろう。

自分が選んだのではない運命を自らの身に引き受けて明るく生きていく最大の人は、障害をもって生まれて来た子ども自身である。

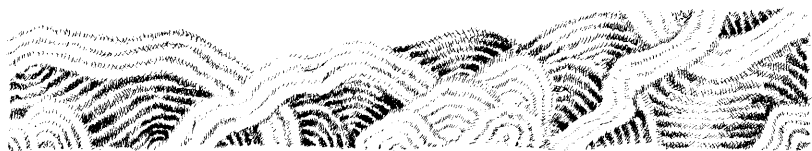
発作が起きそうになると、子どもは大人の傍らに来て座り直し、その時を耐えやす



いようにしている。そのことに気が付かないで、何故こんなに抱っこを要求するのかと考えるのは大人である。発作が終わると次の瞬間には、子どもは何事もなかったかのように遊び始める。普通の大人だったらこうはいかないだろう。この子たちは大人も及ばない自我の力を発揮している。

私自身、障害をもつ子どもの保育を始めたとき、これらが分かかって始めたのではなかった。養護学校に来る子どもたちが、元気に幸せに生きるようにと願って毎日一緒に生活するうちに、この子たちはなんと人間として立派なのだろうと分かるようになった。障害をもって生まれたということ自体、子どもが自分で選んでそうしたのではないのに、だれを恨むのでもなく、笑ってその時を過ごしている、その生き方は私共が日々学ばねばならないことである。

私は毎月、私の学校の母親たちと懇談している。それを教養講座と名づけている。ちょうどこんなことを考えていた日、話題が、自分で選んだのではない運命や境遇、事故や災難と取り組んで、そこに自分を見いだすことが人の生きがいであることに話が及んだ。ある母親が、自分たちはこういうことはよく分かるが、若いときは、船出して冒険することの方を考えていた。この矛盾をどうしたらよいかと話した。私は、この両者は矛盾ではない。最初のことにはっきりと腰を据えてその土台の上に、



船出がある。これから私たちそれぞれに船出があるのではないかと話した。そのことは多くの母親に共感されたようだった。

しばらく休んでいたT男が登校した。久しく見ない間に急に身体が大きくなり、青年になったように見えた。私が傍らにいくと、すぐに親しみを寄せて私の手を引き、学校中歩き回り、おもちゃ箱をのぞいた。T男が肩で風を切って傍らを通ったとき、若い実習生は思わず身をよけた。本人は小さいときと変わらない気分なのだろうが、身体が急に大きくなるとまわりの人の目に変化する。これは成長に伴う危機である。幼いときから能動的に生きる体験を積んだ人は、自分が選べないことの多くある運命の中でも、元気に主体的に生きる下地が作られていると思う。

(愛育養護学校)